

東京大学創立130周年 ノーベル賞受賞者3氏の記念講演



株式会社アイ・ピー・ビー
取締役 特許・技術調査本部 CSO 川口伸明
(1989年、東京大学大学院薬学系研究科修了、薬学博士)

東京大学創立130周年記念講演ならびに記念式典が、雨の中、11月10日、東京大学本郷キャンパスの安田講堂で開かれた。記念講演では、東大卒業のノーベル賞受賞者、江崎玲於奈氏、大江健三郎氏、小柴昌俊氏が、それぞれ「私と東大」と題して講演、1000人を超える聴衆が聞き入った。それに続く記念式典では、アカデミック・ガウンに身を包んだ小宮山宏・東大総長らが壇上に上り、厳粛かつ華麗な雰囲気の中、式典が挙行された。記念講演、総長式辞ともに、未来を見据えた熱いメッセージが籠められていた。



《赤門（旧加賀藩屋敷御守殿門）》
1827（文政10）年建立、国の重要文化財。

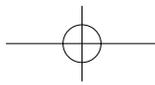
■ 東京大学の成立

東京大学の起源は1684（貞享元）年に江戸幕府が設置した「天文方」と、1858（安政5）年に江戸の蘭方医伊藤玄朴らが私財を出しあって設立した「神田お玉ヶ池種痘所」にまで遡る。天文方は、1857（安政4）年に蕃書調所、1862（文久2）年に「洋書調所」、1863（文久3）年に「開成所」と改称されていった。一方、種痘所は1860（万延元）年に江戸幕府へ移管された後、1861（文久元）年に「西洋医学所」に、さらに1863（文久3）年には「医学所」と改称されている。

また、1630（寛永7）年に林羅山が上野忍岡の私邸内に孔子廟と書庫・塾舎を設立したことに始まる「学問所」（昌平坂学問所、昌平黌）も東京大学の源流の一つをなす。1690（元禄3）年、徳川綱吉の命により神田湯島に移転（今の湯島聖堂）。学問所は、設立当初から林家の家塾と幕府の学問所を兼ねた半官半私的な性格をもって運営されてきたが、1790（寛政9）年に林家の家塾と切り離し、幕府直轄の「学問所」となる。

「開成所」「医学所」「学問所」は1868（明治元）年に、「開成学校」「医学校」「昌平学校」と改称され、それぞれ洋学、西洋医学、国学・漢学の教育機関として再スタートを切った。1869（明治2）年にはこれらを統合して、昌平学校を「大学校（本校）」、開成学校および医学校を「大学校分局」に改組された。同年のうちに大学校、開成学校、医学校はそれぞれ「大学」「大学南校」「大学東校」と改称されたが、1870（明治3）年には学制改革により大学が閉鎖され、翌年に大学は廃止されてしまう。残った2校は「南校」「東校」と改称され、さらに1874（明治7）年、「東京開成学校」「東京医学校」と改称される。そして、1877（明治10）年4月12日、東京開成学校と東京医学校が合併して、日本最初の近代的な大学「東京大学」が誕生したのである。

1886（明治19）年、帝国大学令により、「帝国大学」と改称され、1897（明治30）年に「京都帝国大学」設立に伴い、「東京帝国大学」となる。第二次世界大戦終了後、1947（昭和22）年の大学基準制定を機に、新制「東京大学」に改組された。



■ ノーベル賞受賞者3氏による記念講演



最初におひとり10分ずつ、「私と東大」というテーマで講演があり、一巡の後、総合司会の渡邊あゆみ氏（NHKアナウンサー、東大教養学部卒）が3氏に質問する形で、「人生の困難にどう立ち向かったか」「これからの東大へ」などのディスカッションが行なわれた。

● 江崎玲於奈博士（1947年、東京帝国大学理学部物理学卒。1957年、ノーベル物理学賞受賞）



江崎博士は、「東大に提出したトンネルダイオードの博士論文がノーベル賞の対象になった。博士論文がノーベル賞に選ばれるのは稀なケースなのだが、当時、東大からは何の祝福もなく、秘書に『あなたの学校からは何も言ってこないね』と言われた」というエピソードから話を切り出し、会場を沸かせた。

江崎博士は1947年卒業。同年9月に東京大学に名称が変わったので、東京帝国大学最後の卒業生になる。

「第三高等学校から京都大学へ行くのが普通だろうけれど、十数年京都に居ると、文化の重みがありすぎて、京都を出たくなった。死と破壊が身近にあ

る戦争という環境の中では、人間は、時を越えて永遠な知識を渴望する。私は三高時代、ギリシャの自然哲学、物理学の世界観に関心を持ち、やがて、相対性原理、量子論などの物理学の顕著な発展に魅せられて、東京帝国大学理学部物理学科を志望した」と東大入学の動機を語る。

「戦争が始まり、入試がなくなったおかげで、本当は入れないのに入れたのでは」などとも話す。そして、講演は核心に迫っていく。

江崎博士が東大を卒業した1947年（昭和22年）に、真空管に代わる世紀の大発明、半導体トランジスタがベル研究所で誕生した。真空管と半導体は質的に異なるものだから、真空管をいくら研究し、改良しても、トランジスタは生まれてこない。

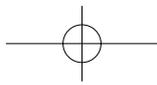
博士は言う。「我々は、殊に安定した社会では、将来は現在の延長線上にあるものと思いがちである。しかし、変革の時代には、革新的なものが誕生し、将来は創られるのである。その時、決定的な役割を演ずるのは個人の創造力に他ならない」。

電話の発明者、アレキサンダー・グラハム・ベルの言葉「時には踏みならされた道から離れ、森の中に入ってみなさい。きっとあなたがこれまで見たことがない何か新しいものを見出すに違いない」を紹介。

さらに、近代サイエンスの基礎を築いたデカルト(1596-1650)の有名な言葉“Cogito ergo sum. (われ熟考する、故にわれ在り)”を引用し、「疑問を發して思考するのがサイエンスの心である。疑わずに信ずるべしとする宗教心とは全く対照的であり、また、やまと心とも大変隔たることを留意せねばならない」と説く。

「サイエンスの心は理性的なマインドであるのに対し、やまと心は何ごとに対しても深い感情(情緒、欲求)を傾けるハートである。西暦800年前後に発明された仮名文字により、やまと心の繊細な表現が可能となり、古今和歌集(905年)、源氏物語(1007年)などの傑作が出現した。ここでは自然(四季推移の美感)と人間(恋愛過程の心情)の二つが中心課題であり、論理的思考とは、ほど遠いのである」と続く。

そして、「与えられた問題を単に解く能力を備えているだけでは条件を満たさない。サイエンスの知



識を理解するだけではなく、サイエンスを進歩させる能力を備えねばならない。それには、サイエンスの心から疑問を発し、未知の問題を見出し、その問題の核心を捉えて、解答を得る能力があってはじめて一人前である」と、真のサイエンス研究者の条件を提示した。

「温故知新が『過去を訪ねて指針を得よ』ということであるのに対し、サイエンスの心は『未来を訪ねて指針を得よ』ということ」と博士は説く。

そして、「未来を訪ねる唯一の手段がサイエンスの探求なのである。科学研究により新分野が開拓され、そこでのブレークスルーやイノベーションが、我々の未来の夢を実現してくれるのである」。

最後に、「サイエンスの心は、自然科学や工学の研究者だけに必要なものではなく、社会科学や人文科学の研究者はもちろん、激しい国際競争が避けられない政治・経済の実務を担当する人たちにも求められるものである」と講演を結んだ。

●大江健三郎氏（1959年、東京大学文学部フランス文学科卒。1994年、ノーベル文学賞受賞）



文学賞受賞の大江健三郎氏の講演は、前日9日、太平洋戦争沖繩戦での700人にも及ぶ集団自決は、日本軍による強制であったとする氏の著作『沖繩ノート』の指し止め請求訴訟の「被告」として、大阪地裁に出廷し、本人尋問を受けたという話から始まる。

「被告の控室で、本日の講演原稿を書いていたが、街宣車が五月蠅く私の名前を呼んでおり、居心地が悪くなって、江崎先生や小柴先生に仲間はずれにされないかと心配した」という掴みで大爆笑を誘った。

大江氏は、10歳で敗戦を迎え、12才の時（1947年）、新憲法や教育基本法が制定された。教育基本法前文

の「普遍的にしてしかも個性豊かな文化の創造をめざす教育」という言葉に深く感動し、12歳の大江氏も

「自分も普遍的かつ個性的な文化に参加して世界へ向かって歩いていこうと決意した」という。

高校在学中の16歳の時、東大仏文学科の教授だった渡辺一夫氏の著書『フランスルネサンス断章』を読んで感銘を受けた。人間が人間らしく生きるとはどういうことかを教えられたと思い、渡辺一夫氏に師事して仏文学者になることを決意して東大を受験した。

1年浪人して1954年に東京大学に入学。3年次、満を持して渡邊先生の研究室に入り、目の眩むような幸福な日々を過ごすも、長続きはしなかった。

「20歳の時、自分は教室に残って研究者になる実力がないことをはっきり自覚。滅入りこむ性格だが、すぐに回復し、その日から、小説家になろうと決心した」。そこで、「英語やフランス語を読みこなせるようになるため、1年留年して、教養の講読の授業に顔を出し、語学の勉強に専念し、また、語学の質問ができる友人を確保した。幸い、研究室にはフランスの新しい小説がたくさんあり、小説の勉強もできるし、戦争中の子供の生活など、書くことはいくらでもあった」。

こうして小説を書き始めたが、渡辺教授が「大学を出てからも研究室に出入りして良い」とってくれたおかげで、5年間に亘り、研究室の本を全て読むまで勉強を続けることができたという。

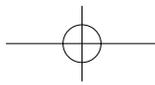
「普遍的でかつ個性的な文化としての小説を書いてきた人生だが、教室で勉強を続けられたということと、勉強の対象としての渡辺一夫という思想家の存在、その2つだけを支えに、小説家としての道を歩みだした」。

「12歳のときの決意、16歳のときの渡辺先生の



本との出会いに始まる単純な人生ですが、心から東京大学に満足しています」と締めくくった。

《法文1・2号館回廊》



- 小柴昌俊博士（1951年、東京大学理学部物理学科卒。2002年、ノーベル物理学賞受賞）



「わたしはどん底に近い成績だった」。そう話すのは、物理学賞受賞の小柴昌俊博士（現在、東大特別栄誉教授）。「東大の学生は成績のことばかり頭にあるが、受け身の認識能力だけで仕事はできない」と力説した。

博士が旧制高校に入ったのが戦争の終わる半年前。「そのころは日本中がみな、食うや食わずの生活で、学生も学費を稼ぐというより食べ物で稼ぐのに精一杯で、高校時代も大学時代も、1週間のうち、一日か一日半くらいしか教室に出なかった」。

2002年3月、ノーベル賞受賞の9ヶ月前、理科系の卒業式で、卒業生に言葉を贈ることになり、恥をしのいで自分の卒業成績の写しを見せて、「私の成績は、どん底に近い成績だった。しかし、将来の見込みが何もないかということそんなことはない」と話したという。

「この大学に就職してすぐ強く感じたのは、この学生は、学校の成績のことばかり頭にある。どうやって筆記試験でいい点とって、順位を上げるか。成績のことばかり頭にあるということが気になった。卒業の成績で、人生の勝負が決まったと思っている人が多いが、そんなことでは決まらない。筆記試験でいい点とって順位を上げるのは大事だが、それだけで人生を計れるものではない。筆記試験の成績で分かるのは、授業に出て、先生の言うことをよく聞いて、覚えているという、そういう受身の認識能力であって、それだけでは人生の仕事や研究はできない。それとは別に、能動的な能力をつけるべき。人生は受動的な能力と能動的な能力との掛け算で決まる。どっちが0（ゼロ）になっても仕事は達成できない」と話したという。

小柴博士は、東大生の成績至上主義を改めさせようと工夫をしてきたことも紹介した。

「物理に来るのは駒場の教養でいい成績とった優秀な学生で、成績のことばかり頭にある。それを変えるために、点とか単位に関係ないことをやらせてみようと思った。そこで、希望者には、大学の設備や装置を貸してあげるから、夏休みに自分で設計した実験をやって自分で解説して結果を出しなさい。やりたかったらやらせてあげる。でも、点数や単位はないよ」と。すると、「点取り虫ばかりと思っていたのに、僕もやりたい、私もやりたい、というのがずいぶん出てきた」。この夏休み実験のアイデアは成功し、やる気のある学生がより多く研究室に入ってくるようになった。

もうひとつは大学院入試、筆記試験に加えて、やる気を判定するために面接試験を併用した。筆記試験の成績が悪くても、面接でやる気を見せたことで入れたという人も。「そういう人が私の研究室に入ってきた。何年か経つといい仕事をして、今、東大の特別栄誉教授になっている」と嬉しそうに話して講演を終えた。

■ ディスカッション

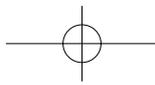


- 私のノーベル賞は、偶然か、必然か？

江崎博士は、古代ギリシャの哲学者、デモクリトス（紀元前460年頃—紀元前370年頃）の言葉『宇宙に存在するものすべては、偶然か必然（Chance or Necessity）が生んだ果実である』を紹介し、「私のノーベル賞も、偶然なのか、必然なのか。チャンスがあってもつかめなければ実にならない。しっかりチャンスをつかんだというのが私の功績では」と自負を窺わせた。

「湯川秀樹博士や朝永振一郎博士の講義を受けたこともあり、いい先生、いい友人に恵まれていた」。

また、戦中には禁止されていた“敵国”映画『風



と共に去りぬ』を観たというエピソードも披露された。江崎氏の友人の父がマニラで押収したものを大学内で上映会をしたのだが、まだ前半の上映中に突然、空襲警報が鳴り、中断してしまった。結局、最後まで観ることができたのは終戦後だったとか。

さらに意外な話。井深大氏と盛田昭夫氏が設立したベンチャー企業の東京通信工業（現在のソニー）に転職しようとしたとき、それまで勤めていた神戸工業（現在の富士通テン）が辞めさせまいと配置転換、研究職から営業職に回され、しばらくの間、江崎氏がガイガーカウンターの営業をしていたという。

●ニュートリノの光を捕らえる

小柴博士は、「困難にどう立ち向かったか」という質問に対し、カミオカンデの予算獲得と、アメリカとの競争での逆転劇について語った。

1970年代半ば、素粒子の弱相互作用と電磁相互作用に、強い相互作用まで統一した大統一理論がいくつか提案された。それまで無限の寿命を持つと考えられていた陽子が有限の寿命でより軽い粒子に崩壊するというもの。世界の実験素粒子物理学者たちは色めきたち、日本でも陽子崩壊を捕らえる実験が提案されたが、そのひとつがこのカミオカンデ地下実験である。

カミオカンデ（KamiokaNDE；NDE=Nucleon Decay Experiment）とは、岐阜県神岡鉱山の地下1000メートルに、3000トンの超純水を貯えたタンクを据え、水中に配置された1000本の光電子増倍管で、宇宙から降ってくるニュートリノを検出する巨大な実験施設である。そこに宇宙からのニュートリノが飛び込んできたとき、純水中の電子と衝突して、青白い微かな光（チェレンコフ光）を発する。これを光センサーである光電子増倍管でキャッチするのである。

小柴博士は、カミオカンデの計画を文部省に出し、4億数千万の予算を獲得し、一息ついたのも束の間、1953年にニュートリノを発見したライネス（1995年ノーベル賞）を中心にアメリカでも同様のデザインで、しかも大規模な実験計画が進んでいることが分かった。

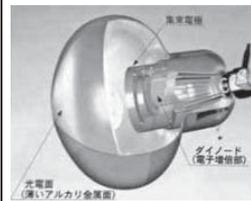
「アメリカの計画では、水の量は6倍、予算は10倍。これでは日本は二流の後追い実験になる。こんなことに国民の血税を使っていいものか、ずいぶん悩んだ。与えられた予算の中で、どうやってアメリカに勝つか。結局たどり着いたのは、大きな玉（光電子増倍管）を開発し、玉の感度を増強すること。あの玉の開発が成功したから日本のニュートリノ物理学は成功を収めた」。感慨深げに小柴博士は語った。



《20 インチ径 光電子増倍管（浜松ホトニクス製）》

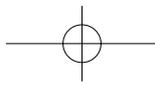
直径約50cm、電子増倍率1000万倍、対水圧6気圧、世界最大の光電子増倍管（Photomultiplier Tube）。小柴博士は、ニュートリノ観測施設カミオカンデ（1983年完成）において、この20インチ径光電子増倍管1000本を用い、1987年2月、超新星爆発によるニュートリノの光を、初めて捕らえた。また、太陽ニュートリノの観測により、太陽エネルギーが核融合によるものであることを実証。これら「素粒子ニュートリノの観測による新しい天文学の開拓」の功績に対し、2002年ノーベル物理学賞が贈られた。

1996年に完成したスーパーカミオカンデでは、この光電子増倍管11200本が使われ、宇宙線によって大気中に創られたミュオンニュートリノのニュートリノ振動



（飛行中に他の種類のニュートリノに変化する現象）を捕らえることにより、それまでゼロと考えられていたニュートリノの質量がゼロでないことを、世界で初めて示すことに成功している。

本郷キャンパスの赤門近くの屋外スペースに、「知のpromナード」というキャンパス整備計画の一環として、ガラスケースに収められた「玉」が展示されている。浜松ホトニクスと小柴研究室が共同開発した直径50cm、世界最大の光電子増倍管である。



《総合図書館》1928年竣工、蔵書数約122万5千冊。

●様々な専門分野の横のつながりを持つ

「これからの東大へ」のメッセージとして、大江氏は、知識人のつながりの重要性を訴えた。

2003年に白血病で亡くなったアメリカの文芸批評家エドワード・W・サイードは『オリエンタリズム』『知識人とは何か』などの書で知られる。

「アメリカの大学は高度に細分化された専門家を育成しており、政府や大企業をはじめ、社会も専門化した人材を求めている。サイードは、それがアメリカの社会の健全化にとって良いことなのか、疑問を感じていた。サイードが亡くなって、私はその疑問を受け継いでいる」と大江氏はいふ。

サイードがイギリスBBC放送で行った6回の講演をまとめた『知識人とは何か』の中で、知識人は、次のように定義されている。「知識人とは亡命者にして周辺的存在であり、またアマチュアであり、さらには権力に対して真実を語ろうとする言葉の使い手である」。さらに、アマチュアを、「社会のなかで思考し憂慮する人間」と定義しており、専門家が無自覚に行っている活動に対して、一個人として根本的な問いを投げかけ続けるアマチュア=知識人こそが権力に対して真実を明らかにする、というサイードの思流が感じられる。

大江氏は、「専門研究者として仕事を始めて何十年か経ち、他の分野とのつながり、知と知のつながりを持った知識人たちが、国家を憂い、世界を憂っている、そのことを話し合う知識人としての場所を創るべき。それがサイードの最後の願いだった」と語る。「私はそれに付け加えて、今、専門を学んでいる学生諸君も、専門を深めると同時に、横のつながり、知識人のつながりを確実に高めていくことで

人生が豊かになる。それは今から始めたほうがよい」と提言。

●普遍的な言語

「これからの東大へ」望むものとして、小柴博士と江崎博士は、「国際言語としての英語」に言及した。

小柴博士は、「中国やインドなどアジアの優秀な留学生を東大に来てもらうためには、ほとんどの講義が日本語で行われている現状では、未だ開かれていない。もっと英語の講義を増やすべきだ」と提言した。

また、江崎博士も講演で提示した「サイエンスの心 (Mind)」と「やまと心 (Heart)」の対比を挙げ、国際化を進める上では、有能な人材を確保するための、英語圏の論理的な発想に基づく、公平で公正な評価システムの確立が重要と力説した。

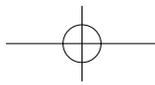
司会者が大江氏に、「日本語の専門家としてどう思うか」と質問すると、大江氏は、

「私は、世界の全ての言語が普遍的であると思っています。小説家は、それぞれの言語で、その言語を、より普遍的なものに磨いていく仕事だと思います」と答えた。含蓄の深い言葉に、新鮮な感動を覚えた。



《育徳園心字池》

通称「三四郎池」と呼ばれる池と周辺の森は、加賀藩前田家上屋敷の庭園「育徳園」が東京大学の敷地に組み入れられたもの。1629年(寛永6年)、前田家3代利常の時、徳川秀忠、家光の二公の訪問のために、新しい殿閣の修築と庭園の造営がなされた。その後、寛永15年、將軍家光の再度の臨邸にあたって大築造を施した。利常の死後、前田綱紀がこれに補修を加え、「育徳園」と命名した。その池は「心」という字を象っているため、「心字池」とされたが、夏目漱石の小説『三四郎』の舞台となったことから、いつしか「三四郎池」と呼ばれるようになった。



■ 記念式典



90分に及ぶノーベル賞受賞者3氏による記念講演の後、創立130周年記念式典が執り行われた。小宮山宏・総長の式辞に続いて、池坊保子・文部科学副大臣、許智宏・北京大学長、佐々木元・赤門学友会副会長がそれぞれ祝辞を述べた。その後、東大紹介DVDの映像、学生・留学生・教職員等からのビデオレターの上映が行なわれ、最後に会場内全員で東京大学の歌「ただ一つ」が応援部のリードで斉唱された。

● 総長式辞



2005年4月に、第28代東京大学総長に就任した小宮山宏氏は、工学部出身。専門は、化学システム工学、機能性材料工学、地球環境工学、CVD反応工学。2006年10月から教育再生会議委員も務める。

「明治の初期、我が国は、鎖国体制の中でも藩校や寺子屋などによって培われた豊かな教養の基盤の上に、諸外国の技術や社会システムなど、西欧の知識の移入を大胆に行いました。そして、近代国家としての教育理念の確立と、それを基盤とした学術文化の飛躍的な発展によって、現在の地位を得ました」。式辞をこう切り出した小宮山総長は、東京大学が世界の「リーディング・ユニバーシティ」のひ

とつとしての地位を確かにしていることを自負する。その背景には、130年にわたる東大の歴史の中で培われてきた、すぐれた教育研究の蓄積があることは言うまでもない。

その一方、「伝統に満足するのではなく、本学のあるべき姿は、大学が置かれている、それぞれの時代や社会との関わりの中で、常に問い直していかなければならない」と戒める。

総長は、現在の東京大学を、明治の草創期（1877年、東京大学創設）、戦後改革の時代（1947年、新制東京大学への改組）に次ぐ「第三の創業」の機会（2004年、国立大学法人東京大学の誕生）と捉える。

「より自由にして、より責任のある立場で、『続ける自覚』と『変える勇気』を持ち、教育・研究を通して知の頂点を目指しつつ、社会にいっそうの貢献を行うことを目指す」という。

『『続ける自覚』とは、学問の自由に基づき、真理の探究と知の創造を求め、世界で最高水準の教育・研究を維持・発展させていくこと。『変える勇気』とは、「時代の先頭に立つ勇気」でもある。教育システムの改革、グローバル化の推進をはじめ、研究環境の整備や組織運営の革新を先頭に立って実行していくとする時、模倣すべき手本は、どこにもない」。

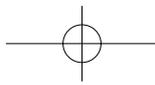
《安田講堂に上る月》

通称・安田講堂の正式名称は、「東京大学大講堂」。収容人数 1144 席。安田財閥の創始者、安田善次郎の匿名を条件での寄付により建設されたものだが、後に右翼に暗殺された安田を偲び、安田講堂と呼ばれるようになった。



《東大生協・中央食堂》

安田講堂前広場の地下にある宇宙船の中のような雰囲気？の食堂。



第三の創業期の中で迎えた東京大学130周年、その記念事業として、様々な動きが進んでいる。

学生や教員がキャンパスの中でくつろいで学問、そして人生を語りあえる空間としての「知のプロムナード」130ポイントの整備。

国際的な活動としては、日中学長会議、プレジデント・カウンスル、東アジア四大学フォーラムなど東京大学が重要視している国際会議の開催。

また、イェール大学に日本研究を行うラボラトリーを設置。ラボの開設にあわせて、現地に「NPO法人Friends of Todai」を立ち上げ、米国内における募金などを行う支援活動も開始している。

インターネット上では、「東京大学アクション・プラン」のほか、講義資料を公開する「UTオープンコースウェア」や、東京大学で実施される各種講座やイベントの講演などを視聴できる「東大TV」(<http://todai.tv/>)など、画期的なウェブサイトが公開されている。



《理学部化学東館》 東大最初の鉄筋コンクリート建築。



《東大病院のレリーフ》「診療・治療・予防」(新海竹蔵・作)



《エルヴィン・ベルツ像(左)、ユリウス・スクリバ像(右)》

いずれも1880年前後に医学部で教鞭を執ったドイツ人教授。

先日、小宮山総長があるテレビ番組で話しているのを偶然見た。これからの大学像についての話だったが、総長は次のようなことを語っていた。

「50年後の東大では、学生の構成は現在とは大きく変わるだろう。今と同じような高校を出て入ってくる学生が3分の1、企業からの社会人学生が3分の1、あと3分の1は留学生というように」。

さらに、研究内容についても、

「現在と同じような専門の研究をしている人が半分、あとの半分は、専門の研究と社会を結び付けていく、我々が『構造化研究』と呼んでいる研究に携わる人」。

小宮山総長らが鋭意進めている「学術創生・知識の構造化プロジェクト」。多様な専門領域を統合化し、再編することで、新たな学術領域を生み出すと同時に、社会への還元を図り、世界の知の頂点をめざすという。

50年後の東京大学に出会うのが楽しみである。



《御殿下グラウンドへの門》



(写真撮影：川口伸明)